

ポライトネスから見た過去形が表わす丁寧さについて

著者	原田 依子
雑誌名	長崎外大論叢
号	22
ページ	9-19
発行年	2018-12-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1165/00000591/

ポライトネスから見た過去形が表わす丁寧さについて

原 田 依 子

A Study of the Pragmatic Function of the Past Tense in English:
From the Perspective of Politeness.

HARADA, Yoriko

Abstract

Recent research on the functions of the modality has been reconsidered with various grammatical concepts, such as the tense or the aspect. For instance, some studies apply the deictic function of the tense into the function of modality, using the scale of “remoteness”. The past tense sometimes expresses a polite attitude towards the hearer, such as “Would you help me?” That is, the temporal remoteness from the present time in the past tense is mapped onto the modality; the degree of probability of the propositions. At the same time, politeness has been studied in sociolinguistics. Therefore, in this paper, I will explain how the politeness of the past tense is in the scale of “politeness” in sociolinguistics. I will first survey the modal meaning of the past tense. Then, I will compare the polite interpretation of the past tense with the concept of politeness in sociolinguistics to find out whether the two are related. In conclusion, through this study, I will explore the function of the past tense from the viewpoint of its function in interaction.

キーワード 過去形、ポライトネス、対人的機能

1. はじめに

過去形は動詞が示す動作・状態、もしくは命題内容が過去、もしくはすでに起きた事象であること表す屈折形態素であり、文が過去時制であることを示す。英語には二つの時制があり、現在時制は事象が現在成立しているものとして、過去時制は事象が過去において既に成立したものであることを示す。従来の時制研究の中では、その体系性は物理的な時間概念と類似したものとして捉えられており、時制の時間は一方向的に進む直線的な構造をしていると想定し、Reichenbachから始まる時制研究において、このような時制観は、暗黙の前提となってきた。

しかし、英語の時制において、常に物理的な時間がそのまま言語の時間概念に当てはまるわけではなく、一部の過去時制は丁寧さを聞き手に伝えることがある。

(1) a. Will you send it to me?

b. Would you send it to me?

(Taylor, 1995)

(1)aと(1)bの違いは、形式的にはwillとwouldにあるが、意味的には(1)bが(1)aよりも、より丁寧な依頼を表す。

(2) Did you want me?

–Yes, I hoped you could help me clean up mess.

(Declerck, 1994)

また(2)では、hopedという形で、過去時制が用いられることにより、「話し手は、自分の希望に必ずしもこだわっていないこと (Declerck, 1994)」を表し、聞き手が拒否する選択を前提にしながら、間接的で丁寧な依頼を表す。

このように、過去形が使われているにもかかわらず、過去時を指示していないものは、モダリティ的用法と分類され、過去時制の持つ現在からの「距離」をモダリティ (epistemic) の領域に当てはめることにより、このような解釈が生まれると説明されてきた (Lyons 1977; Taylor, 1995他)。

そこで本稿では、このような過去時制を表さない過去形が表わす丁寧さについて、従来のポライトネス研究から捉え直す。それにより、時制の解釈を文レベルではなく発話レベルから捉えなおし、時制の指示機能が発話レベルではどのような機能を担うのかを考察する。

2. 時制とモダリティの構造的関係

Taylor (1989) においても、過去時制には soften function があるとして、(1)b のような過去時制が丁寧さを表す場合、現在からの時間的距離が命題の妥当性・必然性というモダリティの枠で捉えられることにより、丁寧さとして解釈されると説明されている。

時制は元来、話し手の「今、ここ」からの時間的位置関係を示す直示表現とされ、現在時制は命題内容を現在の事態として、過去時制は命題内容を過去の事態として表わす機能を持つと説明されてきた。それに対して、モダリティは「命題内容に対する心的態度」と定義され、客観的な命題内容の蓋然性に関する話し手の主観的判断 (「可能性 (possibility)」と「必然性 (necessity)」) を表わし (Hofmann, 1979; Palmer, 1986)、統語的意味的に命題内容を重層的に包むと考えられてきた (中右, 1994)。従って、構造的に見た場合、両者は客観的な命題部分を包むという点では類似しているが、形式的には時制が屈折で表わされるのに対して、モダリティは助動詞で表わされ、また文中における位置関係では、時制はモダリティの上位概念として捉えられる (中右, 1994) など、両者は形式、構造的な位置関係において違いが見られる。Lyons (1977) では、主観的対客観的認識表現の区別、遂行的対非遂行的義務表現の区別を扱い、「発話の論理構造: [遂行部 (法部 [命題部])] = I say so (it is so [proposition])」をとという構造を提案している。

このような構造上の違いにも関わらず、なぜ時制はモダリティ的な意味を担うことが可能なのだろうか。この問いに対して、Lyons (1977) では、モダリティのみが話し手の主観を表わすとは考えず、時制とモダリティを共に認識領域に関わる同一レベルの概念として捉えることを提案されている。それによれば、時制が表す現在からの距離感は現在からの蓋然性という意味に解釈できることから、時制をモダリティの一種と考え、それにより、例えば時制のモダリティ的用例であれば、時制による時間的距離感が、話し手の事態に対する心理的距離として解釈されることになる。

また、Iatridou (2000) においても、「除外特性」という過去形の性質を用いて、過去形は、仮定的もしくは反事実を表す解釈を説明している。

(3) I could cut her throat!

(Declerck, 1991)

(3)は実際にはそのような行為を行ってはいないが、許されるのであればそのような行為を行ってしまうかもしれないことを過去形により表わす。このように、過去形は反事実、もしくは可能性の低い仮定の事態を表わし、そのような解釈を可能にしているのは、過去形が、過去成立していたものの現在は成立していないことを含意することから、過去形が表す事態は現在成立していない、もしくは成立する可能性が低いことを表すとされている。

この考え方には、言語は事態を客観的に表すのではなく、話し手の事態解釈を通して表すと考える前提がある (Langacker, 1991)。実際、通時的に見た場合、文法化の過程においてモダリティの意味は命題の意味を表す言語表現から発展したと考えるものが多い (Traugott, 1989) ほか、共時的にもモダリティと命題内容には認知的関連性があることが指摘されている (Lyons, 1967)。

しかし、事態の記述の仕方は、話し手の事態の捉え方だけでなく、どのように相手に伝えるかという対人配慮も大きく影響する。

(4) a. Can you help me?

b. Could you help me?

(Taylor, 1989)

(4a) では、Can を用いることで相手に手伝えるかどうかを尋ねる文になるが、(4b) のように過去形になることで、「手助けしてもらえらる必然性はない（もしくは当然のものとして期待していない）が、もしも都合がつけば手伝ってほしい」というように、事態の成立する可能性が低いことを依頼することで、話し手のより丁寧なスタンスが伝わる。

(5) a. Excuse me, I want to ask you something.

b. Excuse me, I wanted to ask you something.

(Taylor, 1989)

(5b) は、過去時制で表されることにより、事態が成立する可能性を表わし、それが“want”という動詞と用いられることで、「質問をしたかったができなかった」もしくは「質問することが適切であると認識できる状況ではなかった」ために質問できなかった、という意味が加わる。このように、丁寧さを表すのみならず、過去形が聞き手に対する非難を表すこともある。また、以前聞いたことがあるに関わらず（知っているにもかかわらず）、思い出せずに相手に尋ねる場合、相手の名前は現在の知識として話し手の中にないため、ともに単純過去形が用いられる。

(6) What was your name?

(6)において、解釈は二通り可能で、一つは遠慮がちな申し出、質問を表すが、同時に質問を受ける立場にある聞き手に対して非難を表す、もしくは依然聞いたことがあったけれども、忘れてしまった、という意味で、情報が話し手にとって「遠い」位置にある、さらには話し手にとっては重要でないために、忘れてしまった、という意味を表す。

このように過去形を用いて発話する事で、つまり、話者自身が命題の内容が現実から距離があることを示すことで、命題内容の成立の必然性を示し、その結果丁寧な依頼を表現することになるといえる。ここでは、時間性が命題の妥当性・必然性という「法」の枠で捉えなおされ、時間的距離感が、蓋然性の高さに解釈される。しかし同時に、時間的距離感が、話し手の心理的距離として解釈された場合、話し手にとっての重要度が低い、もしくは話し手にとっては馴染の薄い情報として捉えていることを、聞き手に伝えることもある。それにより、同じ過去時制であっても発話の意味に違いが出てくる。これは、距離感が命題部分にかかるのか、話し手にかかるのかの違いであるともいえる。

3. 日本語との対比

同様のことは日本語にもみられる。

- (7) a. ありがとうございます。
b. ありがとうございました。

(7)aに比べて、(7)bは聞き手に丁寧な印象を与える。しかし、次の例では、過去時制は丁寧さではなく、聞き手に対する非難を表しているとも解釈できる。

- (8) a. 質問があるのですが。
b. 質問があったのですが。

(8)aは、質問があることを伝えているのに対して、(8)bの場合、質問があったにもかかわらず聞くことができなかったことを表わし、状況によっては、質問したかったのにできなかった、という相手に対する非難を表すこともある。また、(9)では、過去時制により、話し手の主観的判断、価値づけを表す。

- (9) a. ご質問はなんですか。
b. ご質問はなんでしたか。

現在時制の場合、質問の有無を尋ねているのに対して、過去時制では、聞き手に質問があることを予め了解していて、その上で聞いていなかった（もしくは聞けていなかった）、という状況であったこと、もしくは、話し手にとってはあまり意味のある質問ではないと感じられたことを含意する。

過去において成立していたという意味から、現在においては成立していないという意味が含意され、また、仮定法で過去形が用いられることから、過去時制が反事実的な事態を意味すると説明されることが多い。ここから、間接性が丁寧さを表すということは、命題部分の事態が実現する可能性が低いだけでなく、話し手の聞き手に対する距離感の取り方も関連していると考えられる。

しかし、ここにおいて、二つの問題点を挙げることができる。

一つは、文の事実性に関して、命題内容の事実性が低いため、その命題を成立させるための必然性は低いことを示すことにより、丁寧さを表すと解釈することが可能である一方で、そのような発話を

行うこと自体に、必然性が低いため、敢えて過去形を用いて丁寧さを表している可能性もある、つまり、距離感が命題のみにかかるわけではなく、話し手の心理的距離にもかかる可能性もあるという点である。

前述の通り、節の構造は話し手の判断を表すのはモダリティ部分と、命題内容とに二分されて捉えられてきたが、近年、モダリティのみを話し手の判断を表す主観的形式と捉えず、発話レベルで捉えようとする立場がある（細江, 1973; Lyons, 1977他）。モダリティ自体は形式範疇であるが、その意味は、真偽判断から話者の感情と呼べるもの、更には対人的配慮に到るまで、広範囲にわたる多様な要素を含む。実際「命題内容に対する」心的態度というより、むしろ発話の「聞き手に対する対人機能的意味」をモダリティの考察対象に含めた先行研究もみられる（Lyons (1977) 他）。個々の法助動詞は語彙的には単一の中核的意味特性を持ち、法助動詞文の解釈はそれらの中核的意味と発話の文脈から得られる情報との相互作用の帰結であると考ええると、時制と法に見られる距離感は、現在や話し手とが明確に区別されたことの表れであるといえることができる。

4. ポライトネスとは

このように、発話におけるポライトネスの解釈には、話し手と聞き手の立場や、直接的表現、間接的表現の使用の方向性が前提にあると予測することができる。例えば、二つの立場や二つの言語使用において、対等な立場における友好的な関係の構築ではなく、非対等な立場に区別された話者同士の関係性の構築では、直接的な表現を使うべき状況で、間接的な表現を使うことは、相手と社会的距離を置くことを意味し、逆に間接的な表現を使うべき状況（フォーマルで、周囲に対する敬意や尊重を表すべき場）で、直接的な表現を使うことは、その話し手の状況判断能力が疑われることを意味する。つまり、それぞれの表現には、社会的、対人的機能があり、使われる状況や聞き手に要求される対応の仕方にも違いがあることになる。では、ポライトネス研究において、このような解釈の流動性はどのように扱われてきたのか、ポライトネス研究を概観した後、過去形がどのような機能を果たすのかについて検証する。

4.1 ポライトネス研究の流れ

ポライトネス研究は、言語のやり取りを通して対人関係を構築・維持するプロセスを研究する分野であり、その研究は、Grice (1975) の「協調の原理」に始まる。Griceの枠組みによれば、日常の会話は「協調の原理」を前提におこなわれ、この原則から逸脱することにより、言外の意味を含意するとされている。その後、Leech (1983) により Grice (1975) の理論に、他者への配慮や礼儀に敵った言動をとるための公理を補完したポライトネスの原理が提案され、例えば、相手にサンドイッチを勧める場面で、“You must have another sandwich.” は、一見、押しつけがましい発話にも聞こえるが、聞き手の利益であると考えられる限り丁寧であるといえる。しかしこれがパーティーの片づけの最中の発言であったり、サンドイッチが好きでない相手に対する発話である場合は、逆の意味になる。また、“Would you mind having another sandwich?” などは、相手の利益になることをわざわざ丁寧にいうことにより、聞き手にとって負担になることを含意し、相手への配慮を欠いた、失礼な (impolite) な発話として解釈されることもある (Leech, 1983)。つまり、単に一般的な社会通念で丁寧さは決まるものではなく、状況や相手との関係性においても、相手に対する配慮への解釈のされ方は異なる。

その後、Brown & Levinson (1987) は「フェイス」(face) という概念を用いて、より対人配慮や相手との「関係性を形成する」側面からポライトネス理論を展開した。「フェイス」とは、人間本来願望として持つ社会的自己イメージのことで、他人の行動に邪魔されたくない、押し付けられたくない、自由を阻害されたくないという「ネガティブフェイス」と、人からよく思われたいという「ポジティブフェイス」という二つの面があるとされている。ただし、どちらが一方しか存在しないというわけではなく、常に両面が存在し、相手や状況に応じて、友好的人間関係を維持し、コミュニケーションを円滑に行うためには、そのどちらを尊重すべきかというバランスの中にコミュニケーションが存在し、二つのフェイスを脅かさないように配慮することが、「ポライト」であると考えた。また、コミュニケーション行動、相手に対する働きかけを持つことから、潜在的に「フェイス」を傷つける可能性があり、そのような可能性のある行動をFace Treating Act (以下FTA) として、そのFTAを補償するストラテジーを具体的に挙げている (Brown & Levinson, 1987)。

ポライトネス理論の前提には、会話の参加者が対等の関係である前提があり、しかし、実際には丁寧さを要求される状況は、話し手と聞き手が対等でないことが多く、話し手と聞き手の社会的距離や力関係によってFTAは異なる (松本, 1988)。

4. 2. FTAを保証するストラテジー

Brown & Levinson (1987) では、FTAを補償するストラテジーを3つ挙げている。

一つは、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーで、積極的面目に訴えかける方略である。例えば、“You must be hungry. How about some lunch?” などのように、単に自分の意見を言うだけでなく、相手にきちんと関心を向けている、または同じ認識を共有していることを伝えることで、相手のポジティブポライトネスを満たすことで、良好な関係を築こうとする方略である。

二つ目は、ネガティブポライトネス・ストラテジーで、消極的面目に訴えかける方略である。例えば、“I just want you if I to ask you if I can borrow a tiny bit of paper.” のように、遠慮を含む、距離を置く、もしくは形式的にふるまうことで、相手のネガティブフェイスに配慮した行動をとる方略である。

三つめは、オフレコード・ポライトネスと呼ばれるもので、敢えて相手の事情に踏み込まない、もしくはあえて意図を明示せず「ほのめかす」方略である。相手への働き掛けをすることは、常に何らかのFTAを犯してしまう可能性があるが、何もしないことでそのリスクを回避するという方略である。従って、本稿で扱っている過去形による丁寧さの表現は、ネガティブポライトネスにあたるものであり、Brown & Levinson (1987) においても、「視点操作」という概念により、直接的に事柄に触れないように、操作的に過去に視点を転換することで、相手のネガティブポライトネスを脅かすリスクを避ける行為だと説明している。

従って、例えば、「手伝ってくれる?」と疑問文で話しかけた場合、話し手は、聞き手ネガティブフェイスを脅かすリスクを負うと同時に、疑問文という形式を用いることにより、聞き手に断られる可能性 (自分のポジティブフェイスを脅かすリスク) を負うことになる。仮にこれが疑問文でなく「だれか手伝ってくれないかな」のような平叙文の場合、相手に対する伝わり方が弱まる一方、断られるという、自分のポジティブフェイスを脅かすリスクを負わなくても済むことになる (「責任回避」(Brown & Levinson, 1987))。

また、次のような場合、(10a)で、聞き手が話し手の意図通り非難として解釈すると、聞き手のポジ

ティブフェイスは損なわれ、同時に話し手に改善を要求されたと解釈したことにより聞き手のネガティブフェイスをも脅かすことになる。

(10) (=5) a. Excuse me, I want to ask you something.

b. Excuse me, I wanted to ask you something. (Taylor 1989)

しかし(10b)のように、過去時制で使われることにより、必然性がない事態として表すことで、非難として解釈した際の聞き手のポジティブフェイスへ配慮した言動になり、同時に相手の行動を拘束するという聞き手のネガティブフェイスを脅かすリスクに配慮することになる。

4. 3. 過去形は発話レベルでどのような丁寧さを示すか

ポライトネス・ストラテジーが行使される状況には、自分と相手の立場が異なることが前提にあり、またそれを明示化、もしくは実現する目的があるといえる（小山, 2008; Durkheim, 1915）。ポジティブポライトネスのストラテジーが、コミュニケーションの参与者すべてに行使されたならば、対等性の象徴となるが、どちらか一方のみが行使した場合、優越性の象徴として上下関係を明示化することになる。つまり、一方向的なポライトネス・ストラテジーの行使は、立場の区別化を示すものとして用いられることがあり、ポライトネス・ストラテジーが、どのように解釈され、関係を構築するかは、聞き手がどのようにふるまうかという社会的な要因によって決まる部分もあるといえる。従って、仮に上の立場の話し手が、聞き手に対して、ポジティブポライトネスを用いたとしても（親しげに話しかけたとしても）、相手が同様に親しく話しかけなければ（同じポジティブポライトネスを行使することは慎めば）、それは話し手の優位性を表すことになる。

また、これが予め社会的に距離のある（上下や親疎など）関係において使われた場合、その関係性において、直接的表現と間接的表現がもつ意味合いは異なる。丁寧さを表す際、直接的な表現は、立場が上の話し手から、立場が下の聞き手に対して使われた際、連帯や親密さとして解釈されるが、逆に下から上の立場の聞き手へされた場合は、厚かましき、押しつけがましきと解釈される。

(11) (=1) a. Would you help me?

b. Will you help me?

(11a) が、例えば教員が指導学生に対して発話された場合、学生は恐縮するよりも、距離を置かれたことによるマイナス面（能力を低く見積もられている、あまり好かれていないなど）を意識する。しかし、(11b) であれば、ある程度親しみを込めた発話として理解することができる。しかし、だからと言って、学生が教員に対して、同様にフランクで直接的な発言をすることは控えることが想像される。また、(11a) に対して、学生側が同様に形式的な対応をした場合、学生側からものは「わきまえた」（Ide 2012）言動をとることで、相手の優位性を認めたと解釈することができる。

また同様に、(11a) が、学生から教員に対して使われた場合、聞き手に対する尊敬や敬愛の態度として解釈されるが、(11b) が発話された場合、無遠慮で厚かましい態度として解釈されることが多い。仮に教員側が(11a) に対して、フランクな表現で返答した場合、相手のポジティブポライトネスに配慮し

た言動として判断されるが、仮に、(11b)に対して、教員が丁寧な返答をした場合は、相手である学生に対するスタンスの拒否として解釈される。

ここから、社会的規範が必要となる状況における関係性の構築は、目下の立場の者がどのように表現を選択するかよりも、目上の立場が示したスタンスが、関係性の構築を決定づける割合が高いように思われる。この際、聞き手に対して、このような解釈が生まれるのは、立場が対等でない場合であり、会話の参加者が対等に同じ表現を用いた場合は、直接的表現であれば親密さ、間接的表現であれば、丁寧さを基盤にした、友好的な関係の構築を意味するといえる。またこの場合の発話の解釈も、全く異なるプロセスになる。

(12) (=4) a. Can you help me?

b. Could you help me?

(Taylor 1989)

例えば、友人関係の会話の中で、(12b)のような表現が使われた場合、相手は余程大変なことを頼まれるか、距離を置かれてしまったように感じる可能性がある。これに対して、同様に遠回しな（もしくは遠慮がちな）返答をすれば、そのまま距離を置いた関係性が維持されるが、仮にポジティブポライトネス・ストラテジーを用いた場合、丁寧さは不必要な遠慮だったとして、関係性は変化する可能性がある。先ほどの教員と学生の関係のように、目上の立場の者が示したものに対して、目下の立場の者が、どのような形で受け入れるかを示すためにストラテジーが使われるというよりは、関係性を会話を通して構築していく（つまりまだこの段階では関係性は確定しておらず、どのような関係を構築するかを決める）ためのストラテジーであるといえることができる。

しかし日本語の場合、日本人の社会的関係性が予め想定され固定されていることが多いため、ストラテジーの伝わり方は全く異なる。

(13) (=8) a. 質問があるのですが。

b. 質問があったのですが。

(13a) は、文として質問があることを表しているが、これが実際発話されると、ネガティブ・フェイスを脅かさない行為として、状況によっては、相手にあまり親しくない間柄として認識されていることを伝える発話になる。従って、例えば、学生が教員に対して発する発話であれば適切であるが、試験前の友人同士の会話で(13a)が発話された場合、友人として距離を置かれてしまったような印象を受ける。また、(13b)の場合、ネガティブフェイスを脅かさない行為というよりは、「聞きたいのに聞けなかった」という、相手に対する批判や非難として解釈することも可能である。ただし、学生が教員に発話した場合は、聞くべき時に聞けず、時間が空いてしまってから質問することに対する言い訳としても解釈することができる。

ここから、丁寧さの表し方を見ると、英語の場合は、相手を尊重する（ネガティブフェイスを脅かさない）ことにより、相手への配慮や丁寧さを表すが、日本語の場合は、相手を尊重することが常に相手への配慮として解釈されるわけではなく、また自分の非を示す（(13b)の例であれば、聞くべき時に聞けなかったことを示した上で、相手に質問のための時間をとってもらおうとする）ことで、相手

を自分よりも上の立場に位置づけ、相手への配慮を示すことがあると考えることができる。

5. 考察：非対称性の指標としての距離

ポライトネス・ストラテジーによる相手と友好的な関係を築くプロセスの前提には、自分と相手の立場の区別を明示化する働きがあることが指摘されている (Durkheim, 1915)。実際、丁寧さが要求される状況は、話し手と聞き手が対等でないことが多く、話し手と聞き手の社会的距離や力関係によってフェイスの意味合いは異なる (松本, 1988)。

相手との有効な関係性のためにフェイスに配慮した表現を選び、過去形もその選択可能な表現の一つとして捉えた場合、例えば教員と学生というような、力関係において非対称な関係にある場合は、過去形が伝える丁寧さは、目下から目上への発話では通常の発話として解釈されるが、目上から目下への発話に使われた場合は、相手を遠ざける発話として (ポジティブフェイスを脅かす行為として) 解釈される傾向が見られた。またそれに対する返答においても、目下の立場から関係性を変化させることは、言葉のやり取りの中ではあまり想定されにくい。

それに対して、相手が対等の立場である場合は、丁寧さは不必要な遠慮として解釈され、場合によっては、相手から能力や理解度を低く見積もられているように解釈される場合がある。対等な立場の場合、話し手、聞き手は共にフェイスリスクを負っているとしても、「対等」な関係であることから、ポジティブフェイスがネガティブフェイスに比べて優位にあり、関係性の構築においても双方向的であるといえる。このような関係性の中で、ネガティブフェイス・ストラテジーを用いることは、聞き手へのネガティブフェイスの配慮というよりは、ポジティブフェイスの侵害として解釈されるのである。

言葉を発して働きかける以上、話しかける側は自分が想定した関係が相手の想定と異なり関係性を損なうリスクを常に負い、聞き手も相手の意図を正しく理解して適切に対応することで相手との関係を良好に保てなくなるというリスクを常に負っている。心的距離を縮めたいときなどには、時折常体を交えて話すスピーチレベルシフトという現象が生じることなどが報告されているが、相手や場面を間違えれば、敬語を使っても無礼になり得、「ため口」も親しみを込めた表現に解釈されれば、必ずしも無礼にはならない。同様に、丁寧に話したつもりが、仰々しい、よそよそしいという印象を与えてしまい、相手や場面によっては、かえって敬語を使わないほうが、「心地よい人間関係」が築けるというような言葉の使い分けが要求されることもある。

ここで、再度文の構造に着目した際、距離感が命題にかかった場合、過去時制による現在からの距離感が、現在から見た蓋然性の低さと解釈され、それにより蓋然性の低い事態であることを表し、それが依頼や提案の発話の中で使われることにより、聞き手に対する丁寧さを表わしたのに対して、現在からの時間的距離が、話し手の事態に対する心理的距離にかかった場合、事態が話し手にとってなじみの薄い、もしくはあまり重要性を持たないものとして捉えられていることを表し、それにより、聞き手に対して、距離を置いた、突き放した態度を表すといえる。話し手と事態との位置関係を示すということは、その表現を通して、話者は自分の視点を示すことであるということができ、発話についてどのような解釈をすればよいのかが、表現を通して話し手に伝わることになる。

6. まとめと展望

本稿では、過去形が表わす丁寧さについて、従来のポライトネス研究から捉え直し、過去形がどのようなメッセージを発話レベルで示すかについて考察を行った。

発話行為が特定の規則に従って遂行され (Searle, 1969)、また解釈もその規則に従って行われるのであれば、過去時制を用いて発話することにより、どのようなリスク算定に基づいて形式を選択するのか、またリスクを補完するためにどのストラテジーを用いるかは、言語により共通する部分もあれば、異なる部分があることも想定される。

今回の例では、英語と日本語では丁寧さの表し方、またポライトネス・ストラテジーの使われ方に違いが見られた。

丁寧さの表し方を見ると、英語の場合は、相手を尊重することにより、丁寧さを表したが、日本語の場合は、自分の過去の過失を過去形で表すことにより、相手との関係が対等ではないことを示し、それにより相手に対して丁寧さを示すことがあることが確認された。

今後は、さらに細かくデータを集めて詳細な分析を行っていく予定である。

【参考文献】

- Austin, J, 1962. *How to Do Things with Words*. Cambridge: Harvard University Press.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson, 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Comrie, Bernard, 1985. *Tense*. Cambridge. Cambridge University Press
- Dahl, Osten. 1983. "Temporal Distance." *Linguistics* 21
- Declerck, R., 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha.
- (安井稔 (訳) 『現代英文法総覧』 開拓社. 1994)
- Durkheim D, 1915. *The Elementary Forms of the Religious Life*. (1912, English translation by Joseph Swain: 1915) The Free Press.
- Grice, P, 1975. "Logic in Conversation". in Cole, P. and J. L. Morgan. (eds.), *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. Academic Press.
- 細江逸記, 1973. 『動詞時制の研究』 篠崎書林
- Iatridou, Sabine, 2000. "The grammatical Ingredients of counter factuality." *Linguistic Inquiry* 31(2): 231-270.
- Ide, Sachiko, 2012. "Roots of the Wakimae Aspect of Linguistic Politeness: Modal Expressions and Japanese Sense of Self". *Pragmaticizing Understanding, Amsterdam: John Benjamins*, 121-138
- 井出祥子, 2006 『わきまの語用論』 大修館書店.
- Jacobsen, Wesley, 2011. "The Interrelationship of Time and Realis in Japanese- in Search of the Semantic Roots of Hypothetical Meaning." 『国語研プロジェクトレビュー』 国立国語研究所
- 小山亘, 2008. 『記号の系譜：社会記号論系言語人類学の射程』 三元社.
- Langacker, W Ronald, 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Volume II*. Stanford University Press.
- Leech, Geoffrey N, 1971. *Meaning and the English Verb*. Longman.
- . 1983. *Principles of Pragmatics*. Longman

-
- Leech & Jan Svartvik, 1975. *A Communicative Grammar of English*. Longman
- Levinson, S.C., 1983. *Pragmatics*. Cambridge University Press.
- Lyons, John, 1977. *Semantics*. Cambridge University Press
- . 1980. “Deixis and Modality” *Sophia Linguistica*. 12:77-117
- Matsumoto, Y. 1988 “Reexamination of the Universality of Face”, *Journal of Pragmatics*, 12.403-426
- 中右実. 1994. 『認知意味論の原理』大修館書店
- Reichenbach, H, 1947. *Elements of Symbolic Logic*. Macmillan.
- Swan, M, 2005. *Practical English Usage*. Oxford University Press
- Searle, John, 1969. *Speech acts: An essay in the philosophy of language*. Cambridge University Press
- Taylor, R John, 1989. *Linguistic Categorization*. Oxford University Press.
- Traugott, E.C. 1989. “On the rise of epistemic meanings in English: An example of subjectification in semantic change.” *Language*, 65(1), 31- 55.
- Vendler, Zeno, 1967. *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.

